

近現代における民俗文化の変容と継承 —東北、気仙地方の梯子虎舞を中心として—

牧野 由佳（総合研究大学院大学博士課程）

本発表においては、東北の気仙地方に伝承される民俗芸能・梯子虎舞を主たる対象として、民俗文化の継承とともに生じる変容に注目して、その社会的・文化的要因を考察する。

虎舞は、熊本や香川、静岡など日本列島に広く分布している。とりわけ多く伝承されているのは、東北地方の三陸沿岸部である。岩手県釜石市や大槌町など三陸沿岸中北部の虎舞は、虎が遊び戯れる様子や笹を食む様子などの虎のイメージを表現した演目や、「国性爺合戦」を題材に和藤内の虎退治の場面を演じる演目などがあり、演劇的な要素が強い傾向にある。一方、南部に伝承される虎舞の多くは、中北部ほど演劇的ではない。神社の大祭で奉納されるだけでなく、正月に悪魔祓いを目的として、集落の家々を廻る虎舞がおこなわれる例が見られる。獅子頭を「虎頭」として使用する伝承地が多数あり、権現舞との関連が指摘されている。また、三陸沿岸の南部においては、気仙地方を中心に曲芸をおこなう虎舞が伝承されている点も特徴である。本発表で検討する梯子虎舞もそのひとつとして位置づけられる。

発表者はこれまでの調査によって、日本列島の梯子獅子と梯子虎舞は、気仙地方や千葉県沿岸部、愛知県南西部、兵庫県南部や淡路島、和歌山県、徳島県など、太平洋側の沿岸部を中心に広く伝承されていることを指摘した。そうした分布は、海上交通を重要な経路として伝播したことが主たる要因ではないかと考えている（日本民俗学会 2019 年度年会口頭発表等）。

また、上演の装置や舞台にも注目し、伝承エリアによって梯子を設置する方法や舞台の形態の差異に地域性ともいえる傾向があることを指摘した。具体的には、兵庫の梯子獅子は脚立のようなハ型に梯子を組む例、また、和歌山や愛知では山車や櫓に梯子を立て掛けるように設置する例などが挙げられる（民俗芸能学会 2020 年 1 月例会口頭発表）。こうした例に対して、気仙地方の場合は、組んだ丸太などに梯子を縄で括り付けるなどして立て掛ける形式がほとんどである。

しかしながら、上記のような設置方法や芸能をおこなう場は、時期によって変化が見られる。大船渡市末崎半島の中森熊野神社で奉納される梯子虎舞は、昭和 30 年代まで神社境内の榎木に梯子を立て掛けていた。だが、榎木が市の天然記念物に指定されたことにより、樹木保護のために梯子を立て掛けないよう行政からの指導があり、現在の形態に変更された。また、同半島の神坂熊野神社でも、椿の木に梯子を立て掛けて梯子虎舞をおこなっていたというが、明治末期から大正期には、祭礼の海上渡御の際に、船上に梯子を立て掛けて虎舞をおこなうようになった。しかし昭和 40 年頃には、海上保安庁からの指導によって船上での梯子虎舞をやめることとなった。

このように近現代における変容は、生業に関わる新しい技術の導入や、戦後の文化財保護の政策の影響など、社会的変化が大きな要因となったと考えられる。本発表では、大船渡市末崎半島の神坂熊野神社に伝承される平組はしご虎舞と、同半島の中森熊野神社に昭和 40 年代まで伝承されていた梯子虎舞を事例として、近現代における継承の過程について変容の背景を中心に考察する。両伝承地は同じ半島に位置するが、祭礼の意義やなどに若干の差異がある。そうした差異にも注目して、民俗文化が変容しつつ、現在にも伝承される意義について考察する。